

新・島根の中山間地から Work as Life

第3回

「戻らない」

野中 浩一



1. 公会所の桜

島根県雲南市、私が住む里山の地域には、「^{こうかいしよ}公会所」と呼ばれる寄り合いのための家がある。40 畳くらいの部屋が1つ、台所が1つだけの、簡素な建物だ。

毎月1度、うちも含めた30戸の家長が集まって、自治会の話し合いを行う場所でもある。年に何度かの節目の自治会では、会の後に皆で酒盛りをする。神事ときは神道の祈りの場になり、とんど祭(※1)や納涼祭の折りには、大人も子どもも地域の皆が集って、飲み食いする場にもなる。



写真は加工済のもの

そんな寄り合いの家である公会所の外には、地域の人たちが8~10台くらい駐車できる庭がある。そして、その庭の一角に地域の人が作っている花壇と、大きな桜の木があった。

コロナ禍のある日の自治会、私は仕事の都合で帰宅が遅く、妻が代わりに自治会に出た。私が家に帰り、妻から自治会での話を聞いていると、公会所の桜を切るという話が出て、その場で採決したとのことであった。枝が伸びて公会所にかかり危ないということや、地域の高齢化で伸びた枝を切ることが難しくなっていることが理由のようであった。

私は、それまで公会所の桜をそこまで意識したことがなかった。1~2年に1回、春にたまたま通りかかったときに満開の桜を見て、立派な咲きぶりに少し心を躍らせる程度の関わりであった。しかしなぜかその日、妻から桜の木を切ることが急に持ち上がって決定されたことを聞き、「自分が自治会に行って話

し合いに加わりたかった」という、ふつふつとした悔しい思いが湧いてきた。

と同時に、その場にいたとして異論を唱えることができたろうかとも思う自分がいた。

「じゃあ、あなたが伸びる桜の枝を切りなさい」と言われたとき、その問いに「はい」と答えることはあまりに無責任だと承知しているからである。この意味は、都市部で暮らしている人にはイメージしにくいことであろう。里山の夏場、いくら時間をかけて刈っても1週間後には繁茂している雑草の繁殖力や、切っても切っても勢いを増して伸びてくる無数のかずらの生命力を知っている人であれば、仕事の合間に植物を相手にする大変さは身に染みている。

それだけではない。私はつい17年前に移住してきた者であり、地域の人たちの多くは何世代も前から住んでいる人たちである。長年地域を守ってきた人たちがいて、今がある。もちろん今だけを捉えれば、同じ地域の住人であり、言うべきことは言った方がいいと考える人は多いだろう。しかし正論や理屈はそうであっても、地域の人の中に根差している観念や空気感は理屈と異なる。そう思えるのは、それでも17年間住み続けたからであろう。

私の中にそうした理解がある中でもモヤモヤとした思いを禁じ得ないのは、以前であればこのような大事が即決されることはほとんどなく、50～60代の古豪^{こごう}の地域人^{ちいきびと}が異を唱えたり、論点整理をしてくれていた記憶が鮮明だからである。しかしコロナ禍の頃に古豪たちは60代後半～70代となり、その多くは一線を退いていた。また、こうした世代交代に加え、コロナ禍の中で集まって話し合うことが難しいという理由により、多くのものごとが簡単に縮小・中止される中で今回の桜を切る話が降ってわいたことも、私の中のわだかまりとなっていた。

2. 支援者の子育て

あまり語られることはないが、教師や医師やカウンセラーなど、不登校を支援する専門家にとって、自分の子どもがどう育つか、さらに言及するなら不登校になるかどうかは、かなりの関心事ではないかと思われる。

もちろん「不登校ではいけない」という意味ではない。親として、わが子が不登校になったことで不登校支援を始め、その取り組みが地域に根付くというような、「親」から「支援者」に移行した例は多い。また、私が運営するフリースクールでも、わが子が不登校（または不登校ぎみ）のため関心をもって採用面接を受ける人が少なくない。

他方、大学で教育学や心理学を学び、そこから支援者として働くことを選んだ20代・30代の「若手」にとっては、他者の不登校支援をすることと、自分の子どもが育つことが同時進行する場合がある。この状

態はなかなか厄介な面があるように感じている。「支援者」としては、学問的な知識を抛りどころにして思春期の子どもやその保護者さんに支援や助言を行う一方で、「生活者」の自分はといえば、まだ幼いわが子との日々に試行錯誤し、家族との関係や子育ての中で揺れながら、うまくいかないことも多い毎日を過ごすのである。

こうした若手支援者は、親として支援の現場で得た経験を家庭で生かし、家庭で得た感触を支援の現場で役立てる。さて自分の子をどう育てるのか、またはどう育つかといった命題と日々向き合いながら、生活者と支援者とを行き来する（このように考えていたのは私だけであろうか？他の支援者の中にも同じような日々があったのではと想像している）。

この「支援者と生活者の間」という命題について、私の印象に残っている人が2人いる。

1人は、私が20代のときにお世話になった、大学に勤める精神科医の方である。私が支援者としての道を歩み始めたばかりの頃から、事あるごとに私のことを気にかけてくださり、今から17年前、私に子どもが生まれたと伝え、1冊の本をプレゼントしてくださった。原田正文さんの「こころの育児書 思春期に花開く子育て」である。この本は、私が不登校の子どもたちを支援する指針になったばかりでなく、まだ生まれたばかりのわが子を、逆算してどう育てることがいいかを考えさせてくれた始点の書となった。

もう1人は、子育てに関する不朽の名著「子どもへのまなざし」を書かれた佐々木正美氏である。氏が島根県に講演に来ていた際に、上記の本をくださった方のお誘いで講演を聞きに行ったことがある（その後控室でお話させていただいた時間は、今も良い思い出である）。その際、講演の中で、自身の子どもが不登校になっていないことについて力強く語っていた姿が印象に残っている。このわが子についての語りは、心の専門家としての矜持^{きやうじ}であると同時に、これまで氏が支援してきた幾多の人たちへの責任でもあったのではないかと勝手に推察している。

「医者の不養生」という慣用句があるが、何かしらの専門家として人からお金をいただいて「支援」およびその「効果」を提供する立場の人間として、自分の最も身近なところ（わが子の育ちやわが家族関係）で支援の効果が発揮されていなければ説得力がない。そう考えることは自然なことであろう。氏の発言を受けて、育ちに関わる支援者は自分が行ってきた仕事の保証を、自分自身の家庭を通じて長年果たし続ける覚悟（※2）が必要なのだと感じずにはいられなかった。そこで今回は、原田氏と佐々木氏の著書から言葉を抜粋しながら、私が考える子育ての要点を著したい。

3. 乳幼児期の育ち

原田氏は、今から20年前の1995年出版の著書で「現代日本では子どもの心が自然に育つ環境が急速に

失われつつある」と警鐘を鳴らしている。そしてその原因のひとつを、「親や子どもにかかわる大人たちが、乳幼児期から思春期までを視野に入れた『子どもの発達のみちすじ』について知らないことにある」と述べている。

また「身体の発達と同じように、心の発達にも順序があります。心も段階を踏んで育っていくものです」とも述べている。ただし心の発達は目に見えないため「心の発達の歪みや停滞には気がつかないもの」であり「それがはっきりと見えるようになるのは思春期になってからです」と心の発達の気づきにくさに言及している。

令和の現代においても、思春期の不登校が急増しているという話題が飛び交っている。その問題点は不登校になることではなく、子どもの心が自然と育つ環境が失われたことと、大人が子どもの発達のみちすじを理解していないことにあるのかもしれない。しかしながら、この論に対してはいくつかの疑問が頭をよぎる。

①日本で失われつつあるとされる、子どもが自然に育つ環境とは何か？以前の大人たちは果たして発達のみちすじを知っていたのか？

②目に見えない子どもの心の発達について、把握や理解は可能なのか？

この2点は、後に私の意見を間接的に述べたい。

次に佐々木氏の1998年出版の著書の言葉を引用して、育ちについて考えたい。

「基本的なところで、子どもたちがどんな人格の人間になるのかということを、ほぼ決定するのが乳幼児期なのです」「この乳幼児期の育児は、ひとことでいえば、子どもの要求や期待に、できるだけ十分にこたえてあげることです」と述べており、この乳幼児期の子育てを基礎工事に例えている。そして、基礎工事が手抜きされている中で、建物の修復で成果をあげることの困難を訴えている。

以上、私が思春期を過ごした1990年代の著作からいくつかの言葉を紹介した。これら当時林立した子育ての方法論は、多くの共感を生み、様々な解釈を発生させた。それは発達の理解や子育ての見通しなど良い学びも多かった半面、ときに「正しい子育て」という意図せぬ親への圧力を生じさせ、「育児不安」や「産後うつ」など、親をナーバスな状態にしたり、「親の愛情不足」を責める根拠となるなど、負の側面もあったように思う。

こうした子どもの育ちにまつわる変化を、もう少し俯瞰して社会的なものとして見てみたい。

ここまで述べた子どもの「育ち」の変化の背景には、産業革命以降～高度経済成長期の、工業化、経済重視、自営から雇用へ、消費社会、核家族化、移動社会などの社会的・文化的な潮流と、それに伴う家族内での子どもの位置づけの変化がある。むしろこうした社会的・文化的な潮流に、家制度が薄れて地域との連帯が弱まった家族集団が、その時々^{いづ}の制度や規範に翻弄されて、よわよわしく押し流されているのが

近代の子育てであるという見方ができるのかもしれない(もちろん1人1人にその自覚はないであろう)。

つまるところ、思春期までの発達を見通した「乳幼児期の育ち」が大事であると私は考えている。加えて、親が「自前」で育てることも大事である。ただしそうあるためには、家族の立場や生活の基盤、ひと昔前で例えるならば、家・家族と農地・山川海と地域集団とが強く結びついて、それで一生やっていけるという確信めいたもの(※3)が盤石であるという保証がなによりも大事なかもしれない。

こうした議論は過去に数多あったものだが、なにも昔に戻ろうという話ではない(※4)。それは無理であろう。それよりも、乳幼児期から思春期までの発達を体得・感受するための、アウトソーシングではない身近な大人による子育てと、そうした子育てが大人にとっても喜びや利得に繋がるような新たな社会の仕組みを考えることが大事ではないだろうか。大げさに感じられるかもしれないが、そうした生(子どもの出産・発育)と死(身近な家族の看取り)に対する主体的な関与そのものが、不登校や引きこもりだけではなく、人口減少とそれに付随する様々な課題解決の糸口になるように思えてならない。

話は身近に戻るが、私が運営するフリースクールに入学相談で訪れる保護者さんから、「わが子が不登校になって初めてこういう場所があることを知りました」との声を聞くことが少なくない。こうした話を聞くにつけ、不登校の支援者や不登校支援の場というのは、必要とする人以外の目には留まりにくいタコツボ的なものであるのかもしれないと思うことがある。

だからこそ、この思春期における不登校という何かしらの負の循環に変化を起こすために、負の循環と距離がとれている人、自分の家族や子育てのやりくりの荒波に耐えながらなんとかバランスを保っている人が、支援者(※5)となり関わりをもつことの意義があるのではないかと考えている。

4. 続・公会所の桜

かくして公会所の桜の木は切られた。私から見れば、あっさりとした最期であった。

そして春が来て、わが家の前の田んぼ道を歩いて公会所に向かい、桜の木がないことをその目で確認した。桜があった頃にはわざわざ見に行くことなどなかったのだが、なくなってから見に行くというのも、我ながらよく分からない行動である。

さらに夏になり、恒例の自治会での地域清掃のとき、ひとしきり地域の農道の脇の草を刈り集め終えて、地域住民20人近くで、お決まりの公会所の草むしりをしているときであった。公会所での草むしり作業をほぼ終えて、なんとなく2~3人ずつが集い雑談するすき間の時間がある。そのすき間時間、多くの地域の人たちが炎天下に直射日光を浴びながら話している姿があった。それを目の当たりにした私の脳裏に、緑に茂った大きな桜の木が映った。

注釈

※1 とんど祭

1 月中旬の日曜日に、火を焚いて豊作や無病息災を祈願する神事である。切ってきた竹を広場に立て、その周りに藁^{わら}などを縄で巻き、使い終わった正月の飾りや書初めなども藁と一緒に置く。その後神職が祈祷を行い、その後に藁に火をつけ竹を燃やす。お神酒が振舞われたり、燃やした火でお餅を焼いて食べたりする（地域により違いあり）。

※2 長年果たし続ける覚悟

「子育ては量より質」という言葉を聞いたことがある。これは、専業主婦時代から共働き・ひとり親働きの時代への移行を表す言葉であろう。ただし、この言葉は忙しく働く子育て中の親を慰撫^{いぶ}するという意味では機能しているものの、実際問題として、量（時間や経験）なくして質（熟達や上手なやりくり）が高まるとは考えにくい。近年の不登校の急増や若年自殺の増加、（そうした子が成人になってからの）非婚化や晩婚化を見れば、近年の子育てを見直す必要があることは議論の余地がないだろう。覚悟という精神論のように思われがちだが、そうではない。子育ては量があったからといって質が上がるとも限らないが、友だち関係、夫婦関係など、うまくいっているときほど量が増え、うまくいかなると量が減るという側面があり、量と質は相互に連動している。ここで言う覚悟とは、自身の体験から学習を積み重ね、改善し、結果に繋げる日々の営みそのものを指している。

※3 確信めいたもの

近年では、終身雇用制度や名称独占資格による専門職化がこうした基盤の代替として機能している面があるように思うが、その範囲は個々の能力や経済力による格差含みである。また、教育関係者や医療関係者など、資格や子どもの発達の知識があっても、仕事による忙しさから、わが子の育ちとの関りが疎かにならざるを得ない状況は、個人の問題ではなく社会構造の問題と言えるのではないだろうか。子どもにとって、心身と脳機能が著しく発達する乳幼児期は数年単位であり、そこで必要とされる近親者との関わりは育児休暇など短期的な制度だけで補えるものではないと、著者は認識している。

※4 昔に戻る

極論を言えば、人工生命、人工知能など、人間を代替するものが急速に誕生し進化している現代において、人間や人間社会そのものがオールド・ファッションとなりかねない怖さを感じることもある。

※5 支援者（個人的見解）

支援者とは、その子やその家族の過去を把握し、今を理解し、未来をイメージしながら、その時代やその文化の中で、環境や制度を調整しつつ、一緒に歩む仕事であろうと考えている。そして支援者と親との大きな違いは、より多くの多種多様な子どもたちの過去と今と未来を体感していることである。この体感のライブラリーを生かして、その子1人1人の成長イメージを膨らませ、その子から見える未来の選択肢の筋の中から希望が湧くものを提示したり、今日の前にある困難のトンネルを抜けるイメージを共有したりすることができると考えている。

引用文献

原田正文（1995）「こころの育児書」エイデル研究所

佐々木正美（1998）「子どもへのまなざし」福音館書店